

佐藤 愛子（さとう・あいこ）

1、プロフィール

「戦いすんで日が暮れて」が直木賞受賞作。いわゆる女性作家とは異質な太い線を持ち、あけっぴろげな庶民性に支えられた作品が多く、独自の風格を示している。

<生没>

1923(大正 12)年 11 月5日 ~

<代表作>

『愛子』『ソクラテスの妻』『加納大尉夫人』『花はくれないー小説佐藤紅緑』『こんなふうに死にたい』『血脈』

<青森との関わり>

作家佐藤紅緑(弘前の人)の娘。詩人のサトウ・ハチローは異母兄。

2、作家解説

父佐藤紅緑、後妻シナとの間に次女として大阪に生まれる。異母兄4人の長兄が詩人サトウ・ハチロー。甲南高女(神戸)卒業。昭和 25 年「文芸首都」同人となる。「冬館」(「文学界」昭和 34 年9月)を発売、山本健吉に文芸時評で、美和子・元子・路子という娘たちの「軽井沢版『三人姉妹』」であると評されて文壇に登場。

代表作に『ソクラテスの妻』(第 49 回<昭和 38 年上半期>芥川賞候補)『加納大尉夫人』(第 52 回<39 年下半期>直木賞候補)『戦いすんで日が暮れて』(第 61 回<44 年上半期>直木賞受賞)『女優万里子』『幸福の絵』(第 18 回<54 年>女流文学賞受賞)。他に『赤い夕日に照らされて』『ああ戦いの最中に』『黄昏の七つボタン』など“ドライなユーモアと塩からいペーソス”の入りまじった軽快なタッチの「猛妻もの」でその本領を発揮した。

また初期の自伝的小説『愛子』、父紅緑の伝記『花はくれないー小説佐藤紅緑』、その底に中年女性のわびしさが感じられる『その時がきた』『鎮魂歌』『こんな

ふうに死にたい』(第8回日本文芸大賞・昭和 63 年)等がある。加えて、軽妙でユニークなエッセイも多い。

3、資料紹介

○『戦いすんで日が暮れて』

図書

1974(昭和 49)年 11 月 30 日

150mm×115mm

この創作集には冒頭の直木賞作品「戦いすんで日が暮れて」を含めて8短編を収録。松本清張はその選評で「近ごろ珍しいドライなユーモアで塩からいペーススがある。これが作者の技巧でなく体質から出ているところに信頼がもてる」と高い評価をしている。